

第3期札幌文化芸術円卓会議 第4回会議

会 議 録

日 時：平成26年7月1日（火）午後6時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下1階 1号会議室

1. 開 会

○事務局（加茂市民文化課長） 本日は、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

定刻となりましたので、ただいまより、第3期札幌文化芸術円卓会議の第4回目を開催したいと思います。

きょうは、尹委員から、体調を崩されて欠席する旨のご連絡をいただいております。それから、尾崎委員と富田委員につきましては、若干遅参するというご連絡をいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

今回は、前回、いろいろな文化芸術の事業を提示していただきましたので、きょうは、それを少しまとめるような形で、その背景に隠れるテーマといったようなものについて、ご議論をいただければというふうに思います。

それでは、北村委員長、南副委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議 事

○北村委員長 こんにちは。

もう7月になってしまって、1年の半分が終わってしまいました。早いですね。あと2週間ほどすれば、第1回目の国際芸術祭が始まるということで、多分、今、スタッフの方もてんてこ舞いではないかと思うのですけれども、そのご苦労は大変よく存じているのですが、なかなか市民の人たちにこういうことがあるのだということが浸透しないというのはどうすればいいのか、私も事業のたびごとに言っているのですけれども、なかなか浸透しません。何とか19日をよい形で迎えられれば、また2カ月間を過ごせればと思っています。

きょうは、第4回目になりますので、この円卓会議もちょうど折り返し点ぐらいになっているかと思います。いろいろなアイデアが出ていますので、少しずつそれを固めてテーマなどを探っていくというのがきょうの会かと思います。

前回、各委員に網羅的に挙げていただいたものを少しまとめた形で表にさせていただきました。一応、目を通していただいていると思うのですけれども、せっかくの円卓会議なので、本当に円卓会議になるように、皆さんで自由に活発な意見が言えるような時間をとりたいと思います。

まずは、各委員のご意見をお伺いしますけれども、なるべく手短かにお願いして、その後、それぞれの委員の意見などを聞いた上で質疑応答などの時間を十分とればよいと思っています。今後、どういう形でまとめていけばいいのかということも、少しずつ方向性が見えてくればよいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

いつも石川委員から始まるので、きょうは逆さまに持ってきました。尹委員がいらっしゃらないので山田委員からです。尹委員のご意見は、後でまとめてお伺いしたいと思います。

山田委員、お願いできますか。

○山田委員 配付いただきました具体的事業の背景にあるテーマの整理というところで私
が書かせていただいたことを簡単に申し上げます。

今回、記載例を参考にさせていただき、三つ書いてみました。

大もとは、皆さんから提出された事業提案の分布のA3判横サイズのものからピックアップ
したものです。

一つ目は、ホームページなど、情報発信方法の改善ということで、情報発信に力を入れた
ほうがいいのではないかとということの一つ挙げてみました。二つ目は、文化芸術施設の
整備です。これは、既存のあるものをさらに活用したらいいのではないかとことです。
三つ目は、人の観点から文化芸術人材の育成ということを挙げてみました。

まず一つ目の情報発信についてです。ほかの皆さんも記載されていますが、インターネ
ット、ポータルサイト、ホームページ、そういったものを見た方にとって情報が手に入り
やすく、かつ気軽に出かけられるような情報発信方法というか、今あるものの使い方の工夫と、
さらに見やすいものにしてはどうかということが一つです。

二つ目の文化施設の整備についてです。委員の皆さんからも出ていたところをピックア
ップさせていただきましたけれども、500m美術館もあります。今、たくさんの方が
歩いている地下歩行空間のスペースの活用も一つの手だと思います。それから、既存の観
光文化情報ステーションが東西線の入り口近くにありますが、もっと見やすい展示
と、さらにそこからの情報のとり方がスムーズにできるようになればということもあれば
ということです。

三つ目は、人の関係です。まず、アートマネジメント人材といえますか、次の世代の札
幌の芸術文化を担う人材が育つ仕組みづくりとして、各委員の皆さんの中から三つほどピ
ックアップ事業として取り上げました。

これは、南副委員長の若手アウトリーチの取りまとめのシステムの創設、清水委員のオ
ープンな文化芸術ミーティング、いろいろな情報交換をしながらですね。それから、北村
委員長のアートマネジメント人材の育成などを事業として取り上げるのはいかがかとい
うことです。

以上の3点挙げさせていただきました。

○北村委員長 ありがとうございます。

全体の議論は後ほどしたいと思います。

富田委員はおくれるようなので、鈴木委員にお願いします。

○鈴木委員 私は大学生ということなので、日々感じていることを前回は挙げさせてい
ただいたのですが、今回も、皆様の事例ではなくて、自分が挙げたことをただまとめ
た感じになりました。

基本的に、一つ目と二つ目は両方とも人材育成のことに關してです。

一つ目の人材育成の消費者拡大というのは、言い方が難しかったのですが、基本

的に市民の人たちが触れられる機会をもう少し増やしたほうがいいのではないかということです。二つ目は、それぞれ次世代の人たちがアーティストとしてより活動しやすい環境をつくったほうがいいのではないかということです。

二つ目に関しては、東京でしたらアーツ千代田3331とか、山形にある月山青春音楽祭という1日限りのイベントがありますので、私たちの世代の人たちは、こういう環境や、そういう組織をまとめてくれる環境があるところに勉強をしに行って、札幌に戻ってこないのではないかと感じていますので、情報発信とか広報面のことについても早急に実施することは大切だと思いますが、この面に関しても、いい人材とか若い人材を確保するためには、早急に何か行動を起こすべきなのではないかと思い、この2点を挙げさせていただきました。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

清水委員、お願いします。

○清水委員 手短かに説明するので、ホワイトボードに書いてもいいですか。

私は、4点挙げたのですが、そのキーワードとほとんど同じです。

やはり、自分でピックアップしたのもそうですし、皆さんのまとめを見ても、情報の発信、アクセス、収集などに注目しているもの、講演や企画を扱うもの、また人材育成と市民参加というキーワードがすごく多かったと思います。

それで、ちょっとだけ足すと、上の二つがちょっと近いものになって、それぞれもうちょっと広くとると、こういったものに近づいていって、これら全部を、新しくできるアートセンターに盛り込んで解決したらどうかと思いました。

以上です。

○北村委員長 清水委員のまとめでは、いろいろな具体的なものをアートセンターに集約するというご意見でした。

尾崎委員、いらっしゃいませ。

きょうはいつもと逆の順序で発表しておりますので、ちょうど間に合いました。簡単で構いませんので、何かご意見をお願いします。

○尾崎委員 ごめんなさい。ちょっとお時間をいただけますか。

○北村委員長 それでは、石川委員、先をお願いします。

○石川委員 それでは、私を簡潔に説明させていただきます。

三つ案を出してしまして、この三つは割とつながっているところです。

まず、1番は、読んだとおりですけれども、一番言いたいことは、札幌市が文化芸術について取り組んでいるのだ、創造都市に取り組んでいることを知ってもらい、興味のある人にも興味のない人にもとにかく知ってもらい、とりあえず、札幌市というのは、自分は文化も芸術も興味はないけれども、札幌市が創造都市ということをやっているのを知っているという認識をしてもらうのが全てのベースになると僕は思っています。それがないと、

結局、札幌が何をやっても、何か変わったことをやっているな、一時的にそういうことをやっているのかなという話になってしまうのです。ユネスコに認定されて、これから札幌は創造都市というものを観光資源としてやっていくのでしたら、まずはそれを認識してもらおうということが一番の趣旨です。

次に、2番は、市そのものがアートについての企画力をつけるということです。これは、アーツカウンシルなどのお話も出ていますが、1番にもつながるのですが、札幌市が文化芸術を本気でやっているということを示すには、やはり、市そのものが文化芸術に関しての企画力をつけないと、いつまでたっても難しいと思うのです。基本的には受け身のようなところが多いと思うのです。こういった企画があれば助成金をあげますとか、こういったデータベースをつくるので人材を募集しますというところからさらに一歩進んで、札幌市みずから、いろいろなアーティストのアトリエやデザイン会社などに飛び込んでいって、札幌市のアートづくりについてやってほしいということをお願いする。それプラス、札幌市自体、常駐のアーツカウンシルみたいな、アートセンターも出ていますが、アートについてわかる人材が、外部委託などではなく、きちんと内部に継続的にあるという状態があると非常にいいのではないかと考えております。

最後の3番目は、1番と2番が融合しているようなことで、私は再三言っているのですが、札幌市の全部署でアートを取り組むようなことができないかということです。

札幌市がアートの創造都市だということを市民にわかってもらうには、少なくとも札幌市職員全員が認識しないと市民にも伝わらないと思うのです。ですから、最初は話し合い、ディスカッション、意見交換というレベルでいいので、時間をつくっていただいて、創造都市というテーマで全部署を巻き込んだ会議などを定期的にやっていただくと、札幌市の職員の認識度が上がれば、札幌市の職員は皆さん市民との接点を持っているわけですから、市民の認知もじわじわと上がっていくのではないかと思います。3番目の中にいろいろと書いてありますけれども、一番言いたいのは、札幌市の全部署でアートに対する取り組みを考えていただければということです。

以上です。

○北村委員長 富田委員がお越しになりました。

今、何をやっているかといいますと、皆さんから出していただいた意見を簡単にご紹介いただいて、自由にディスカッションしながら、いろいろな方向性を見つけていこうというところですよ。

尾崎委員、心は落ちつきましたか。

○尾崎委員 遅れて来てすみませんでした。

今回のテーマは、ごめんなさい、僕は一つしかまとめられませんでした。頭の中に幾つかあったのですが、一つしか出せていませんでした。

前回出したものを僕の中でもまとめて、皆さんが思われていることとかぶるところがあります。それは、文化芸術の情報収集・発信機能の部分を集約して1個どこかにまとめら

れないかということです。これは、僕が理想として思い描くアートセンターの仕事になるのだらうと思います。本当にアートセンターがそういう形になっていくのかどうかちょっとわからないですけども、僕が思うアートセンターの仕事であるので、ここで話すのがいいのかどうか、ちょっと微妙だと思いながらまとめていきました。

やはり、南副委員長が出されていた各文化施設が出されている情報誌の集約などということはやっていけることだと思いました。また、山田委員や富田委員から出されていた案も、一つにまとめることで、より多くの情報をうまく活用できていくのではないかと思います。

その機能をさらに高めて、市内だけではなく、海外からも情報を収集したり、札幌の情報を海外に発信していくことができれば、より広いところにアプローチしていきまし、他都市、海外からもアクセスされるようなものにつながっていくのではないかと思います、書いてあるとおりのことを考えました。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

富田委員には時間を差し上げますので、南副委員長、お願いします。

○南副委員長 私も、大体似たようなことですが、3点考えました。

一つは、アートセンターというものがあつたとして、その機能をどういうふうに考えるか。例えば、尾崎委員の札幌バレエ団の創設というのは一つありかと思っていました。実は、創造都市さっぽろでアートをやるのだというときに、そこに何か物がなくてはだめだらう、箱があつてもその中には魂がなくてはだめだらうと思います。

例えば、札幌がすばらしいバレエ団のダンサーグループを持っている。そういうソフトを持っている。そして、そこに来れば、その人たちがいる。あるいは、その人たちが札幌という拠点を持って、フランチャイズにしている。今、バレエ団の話をしました。ほかにアクターであつてもいいし、アートセンター専属、歌劇場があるのであれば歌手でもいいだらうと思うのです。

そういう人材育成ですが、アートマネジャーは今までずっと言われているのですけれども、それ以上に、僕は舞台人として言わせていただくと、そういった人たちも研修生という形でもいいので、5年研修契約で、市の職員としてアートセンターのスタッフとしてダンス三昧の日々で訓練する、公演を常に定期的にやる。そして、5年研修後の先はどうなるかわからないけれども、そのレベルが高く、プロフェッショナルのレベルであれば、世界中から人が来るだらうし、それが観光資源にもなっていくだらうと考えました。

そこに書いてあるように、そうした人たちが定期的にコンサートをし、地元のテレビ局との人材交流、あるいはアウトリーチといったようなこともできる。そういった研修生を札幌市内だけではなくて世界中から呼び寄せるような魅力的な契約内容になっていけばいいのではないかと思います。

そういう意味では、1億円規模ぐらいの予算で人材育成をやっていくということが大事

かと思えます。最終的に、市の企画力とあるけれども、物がなくてこちらにあるものを持ってきました、それをこちらへ出します。あちらへ物を持っていきただけでは、やはり企画力に限界があるのです。

例えば、美術館でも自分のところに絵を置いていなければ、貸し絵だけでやっても大したことはできないのです。やはり自分のところに持っているものがある、それを見せる、それも貸し出すということです。それと同じように、そういったダンサーやアクターを持つ必要があると思います。今回、その辺を一つ新しく押し出したいところです。

あとは、基本的には皆さんとほぼ同じで、情報の展開の仕方、アートセンターという中央からの視点、逆に、市民それぞれから湧き上がるように出てくるいろいろな技術やアートに参加したいというものを行政がいかにかみ取り、いかにやり方をしていくのか、そういったものをどううまくつないでいくかということも必要ではないかと思えます。

以上でございます。

○北村委員長 それでは、富田委員を後回しにして、私から先にやります。

皆さんとそれほど変わっているところはないですが、一つは、札幌がアートのまちであるということ、札幌市民も日本国内も国外の方々も認識してもらい、一つのイメージなりブランドなりをつくっていく何かができないか、札幌はアートのまちだよというイメージづくりができないかということです。これは、簡単にはできないと思いますけれども、そういうことです。

2番目は、清水委員は、新規にできるアートセンターのほうに具体的な事業をまとめていくということでしたが、私も、創造都市の札幌を実質化するのがアートセンターなのかと思えます。言ってみれば、ここに皆さんの意見を網羅的に落とし込んでみて、機能としては大きく三つで、企画公演をし、3年後の国際芸術祭になったりするだろうし、500m美術館が今後どうなるかわかりませんが、この企画展示とか、メディアアートの関係では、創造都市さっぽろになるのであれば、その関係の何かが必要だろうと。また、南副委員長のように、フランチャイズまでは考えていなかったのですけれども、自主的な事業として何か公演を行う。バレエダンスなど、あるいは、そういうフランチャイズの劇団があれば、それに越したことはないと思います。

それから、広報の関係もここに落とし込んでみました。アートセンターということで、特に考えたのは、観光文化情報ステーションを拡充して、そこで全ての情報を収集し、チケットの販売を行ったり、アートの案内をしてみたり、皆様が言うコンシェルジュやボランティア、そのようなところもここが担うということです。

3番目は、ここではまだ出ていませんが、最初の1回目のところに出ていた札幌版のアートカウンシルみたいな役割もここに落とし込んで、財務といいますか、マネジメントのことですね。あるいは、企業との連携で、アートを利用して企業活動をしたいが、どうしたらいいのだろうかというコンサルタント的な業務もここに落とし込んでおります。

それから、裏面は、今まで考えてもいなかったのですけれども、僕は、いつも痛ましい

など思っているのは、街中にあるパブリックアートが放置自転車に囲まれてしまっていて、すごく邪魔物扱いにされてしまっているのですね。ほとんど補修もされず、傷んだままになって、何でここにこういうものがあるのか、意味がわからなくなってしまっています。それを少しずつ更新していったらいいですか、取りかえていったらいい。そして、取りかえた後に、安らかに過ごすような場所に置いていただくということですね。将来、札幌市が公園をもしつくるのであれば、札幌だけではなくて、日本中からの引退彫刻公園みたいなものがある、その維持は大変ですけれども、引退後のパブリックアートとしてやれば、新しくできたところに新しい作家が設置できる機会もできると思っています。これは思いつきですけれども、そんなことも考えていました。

それでは、富田委員、落ちつきましたか。

今、皆さんから出していただいた各委員のご意見を簡単に紹介していただいて、その後、みんなで全体議論をするという流れになっています。

○富田委員 私が出させていただいた意見は、かなり端的なことです。

一番最初に手をつけるとすれば、これではないかということで、二つに絞らせていただきました。

一つ目は文化芸術に関するメディア機能の強化です。二つ目は文化芸術を担う子どもたちということで、子どもたちを前提としていますが、学びということ言えば学生も入ると思っています。創造力を育むというちょっと抽象的な言葉ですが、これをもうちょっとかみ砕いて説明したいと思います。

まず、メディア機能の強化ですが、これは、考えてみると全ての基礎、軸になるものだと考えています。リサーチとかアーカイブスとか、先ほどいろいろなものがあるとおっしゃっていましたが、僕は、札幌にあるものだけではなくて、札幌はもちろん、いろいろと調べますが、世界に目を向けて、今、世界でどういうことが起きているのかということも同時に照らし合わせるわけではないのですが、そういうことをしていかないと、文化芸術のクオリティーは上がっていかないと考えています。その意味で、中だけではなくて、いろいろなリサーチネットワーク内外ということですね。

まず、メディア機能の強化は、前回もお話ししましたが、市民に欲しい情報がうまく届いていないのではないかとのお話が今までの議論の中で出ていたので、やはり、その入り口になるような、初めて文化芸術に触れるという機会を増やしたり、リサーチした情報をポータルで紹介して触れるという機会を広く持ってもらうことが第一だと思っています。その情報を編集して発信するという一連の流れがメディア機能の強化ということによって書かれています。

ですので、これはインフラと言ってもいいと思うのですが、観光文化情報ステーションを例として出させていただきますが、あれは編集されていないと思っています。とにかく、チラシが置いてあって、集約されているけれども、コンシェルジュと言ってもいいのですが、人が介在することによって、この人には何が合うのか、ある意味、マッチン

グミたいなものですけれども、そういう編集機能を持った文化ステーションはいろいろなニーズがあるので、この人にはひょっとしたらこれがというように届ける機能がそこにあるといいかなと思います。もしステーションとして出先みたいなのが行われるのだったら、そういうことかなと思っています。メディア化といいますか、そういうことを考えてみました。

あとは、子どもたちの創造力です。これは、結構大きいことを書いているのですけれども、僕は共育という言葉を使いました。ともに育むという意味ですが、最近、いろいろなワークショップをして感じるの、文化芸術に接する機会を与えるのは、実は親御さんだったりするのです。ですから、子どもを育むということと同時に、親と一緒に文化芸術に触れたり、そういうものを考えたりする機会はすごく必要ではないかと思っています。学校だと、学校で子どもだけが美術、芸術を学んで、宿題として持って帰るかもしれないですけども、一緒に体験することによってコミュニケーションが生まれて、ほかの家族、親御さんとのコミュニケーションが生まれて、文化芸術に対する意識が高くなるのではないかと思います。

そういう意味で、子どもがつくる展覧会というのは、子どもだけでは本当につくることはできなくて、それをサポートする親がすごく大事になってくると思っています。これは、食×アートというものも、食育ということで、子どもたちの可能性を導き出す導き手としての大人がすごく大事になってくると思います。

アーティストインスクールは、逆に、地域の中にアーティストが入って行って、何かできないかということです。

また、ダイバーシティー、寛容性とか多様性ということで、これからは、一人一人がどういう多様性を持っていくか、それがアートの持っている魅力でもあるので、いろいろな表現を持ったいろいろな人がどうやってうまく生きていけるのかということを考えていかなければいけない社会だと思っています。そういうところに、アートというものを切り口としながら、社会的なことも意識できるようなところまでやれば一番いいなと思います。

地味ですけれども、ちょっと長期的な視野に立って、これをずっと続けて行って、それが花開くときが来るのではないかと思います。これは、イベントとは違って、すぐに華やかな結果は出ないかもしれませんが、すごく必要なことではないかと思っています。

○北村委員長 ありがとうございます。

伊委員は体調が悪いということで欠席ですので、事務局からご意見を簡単に紹介してください。

○事務局（高橋調整担当係長） それでは、簡単に読み上げさせていただきます。

伊委員からの意見ですが、まず、1番目は、市民が主体となった文化芸術活動ということで、さまざまな方の事例が書いてございますが、理由等の欄には、何よりも市民自身が第三者的に見る側として立ってはいない発展性がないということで、市民が自分自身で参加することによって、より身近に、より発展性をもって活性化させることができると思いま

すということでございます。

2番目は、文化芸術は生ものということで、常に学んで新しいものを取り入れ、活動を続けるということで、同じものを同じ感性でということでは、いつまでも広がりがなく、飽きが来てしまうので、もっと感度を上げて、新しいものを取り入れて、そこからまたヒントを得てということで、果てしなく前に進み続ける文化芸術分野に対応できてこそ、真の文化芸術のまちになれる。そのためには、たくさんの学ぶ場の提供が必要不可欠だというご意見になっております。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

一通り皆さんのご意見をお伺いしましたけれども、いかかですか。ここの点は意味がわからないのもうちょっと説明してほしいとか、短い時間で言い足りなかったのもう少しお話ししたいということがあれば、お出してください。

○鈴木委員 質問ですけれども、皆さんは情報発信のことについて結構ご意見を出されていたので、チラシなどをスマートフォンのアプリで載せればいいのにと考えていたのです。

そういうことをやっていないのか調べてみたら、札幌市でつくっているのかはわからないのですけれども、札幌市のイベントなどを簡単にまとめているアプリを一つ見つけたのです。それは、札幌市は全然かかわっていないものですか。

○事務局（加茂市民文化課長） かかわっていないと思います。

○鈴木委員 わかりました。

そこに書かれているのは、市民に対してではなくて、道外の人たち向けのことについてしか書かれていなかったのも、もし札幌市でつくっているものであれば、また別にそういうものをつくれればいいのではないかと思っていたのですけれども、違うみたいですね。

○北村委員長 そういうアプリがあるのですか。

○事務局（加茂市民文化課長） 大々的なものしかなかったのです。真駒内駅でやる花火大会などですね。

○事務局（松平市民交流複合施設担当係長） ようこそ札幌という観光客向けのホームページがありまして、そこに、各種イベントということで、PMFやシティ・ジャズ等々を載せております。観光客向けでもありますし、北海道民、市民向けにもございます。

さらに、今、札幌いんぷおというものを立ち上げております。例えば、携帯電話を持って時計台に行くと、時計台の情報などが入ってきて、次に、時計台から違う観光場所へ行くことすると、そのルートが出たり情報が出たりというものも観光文化局で作成しております。

○北村委員長 そういうアプリがあったり、情報があったりするのに、なぜ私たちはまだ不十分だと思っているのでしょうか。

○石川委員 僕も含めて、情報発信の仕方を見直すべきではないかという意見が結構出ています。ただ、私の知っている範囲でも、札幌市は結構いろいろやられていると思うので

す。SAPPURO（サッポロスマイル）みたいなこともなされているし、テレビ番組などでもラジオ番組でも札幌市のいろいろな情報を告知したり、結構やっているとは思っています。ただ、その辺の出し方がわからないのかなと思います。極端に言えば、その辺を札幌市のホームページの大々リニューアルということを提案したのですけれども、札幌市のホームページを見ればその辺のことも全部わかるような集約の仕方できないかと思いません。

前にも言ったのですけれども、札幌市の行政的なことで、住民票をどうやってとるのかと思ったときに必ず見るのは札幌市のホームページのウェブサイトで、札幌市のホームページに行けば札幌市の情報が全部わかります。

また、私が知っている範囲では、SAPPURO（サッポロスマイル）は札幌市がやっているとは思っていない人が結構いるのです。SAPPURO（サッポロスマイル）のウェブサイトを見ても、札幌市がやっているということを余り強く出していないような気がするのですけれども、その辺はどうでしょうか。これは札幌市主催のプロジェクトですみたいなことは出していましたか。

○事務局（加茂市民文化課長）そこは、余り色濃く出していないです。

○石川委員 何か理由があるのですか。

○事務局（加茂市民文化課長）私は、以前、SAPPURO（サッポロスマイル）のフェイスブックなどもやっておりました。

札幌を笑顔のまちにしようという意識の高い方々でグループを組んで、札幌市がやると、どうも行政ぽくなって余りおもしろくないので、余りその枠をつけないようなイメージでやってみようかということで、実質的には札幌市のお金を出しながらやっているのですけれども、あれはチャレンジの部分です。そういう意図もありまして、バイ札幌市みたいなものは極力出さないで運営をしてきました。

○石川委員 僕個人としては、そういうものがもっと前に出したほうが、札幌市はそういうことをやっているのだぞというのがわかって、いいような気がしました。

○北村委員長 情報の量はいっぱいあると思うのですけれども、マッチングという言い方がいいのか、必要な人に必要な情報をどうやって届けるかということでしょうか。

SAPPURO（サッポロスマイル）もそうですけれども、シティ・ジャズもあたり、PMFもあたり、情報誌もいろいろな各種あたり、それが集約されていないということですね。集約すればいいのかどうかわかりませんが、どうすれば必要な情報が必要な人に届くのでしょうか。

○山田委員 どうすればというのは、自分の考えがまとまっていないのでうまく言えないのですけれども、まず、今、皆さんのお話にあったツールというか、アプリから始めて、いろいろなインターネットのことがあって、いっぱいあって、結局、この情報が欲しいというニーズは190万人の市民の皆さんそれぞれ違うものですから、いっぱい情報があるのですけれども、実は、いっぱいある情報の中から自分が欲しいものはなかなかつかめな

いといいますか、それは普段感じます。

いろいろな方のお話を伺っていると、こんなにあるのに欲しい情報がないので、どうしたら調べられるのですかと主催事業の関係のアンケートに書いてあるのですね。それを見ると、例えば教育文化会館のことを申し上げて恐縮ですけれども、情報誌をつくったり、情報誌のおもしろバージョンをつくったり、非公式にそれぞれフェイスブックをやったり、ツイッターも非公式にやっているのです。また、チラシも、市の施設なので、そのルートで各文化施設、あるいは区民センターを初め各施設で受けていただいて配布していただけるのですけれども、アンケートを見ると、なかなか届かない人が結構いるのです。

ただ、個別配付の最高の媒体の広報さっぽろがありまして、物によっては、あれを見て結構来る人がいるということがあります。では、私たちは、場合によっては、地下鉄の中にチラシで広告するよりも広報に頼るのがいいか、しかし、広報には文字の制限があるので言いたいことはタイトルぐらいしか言えない。

そういう中で、いろいろと申し上げましたけれども、結論を出せません。要は、情報を欲しい人が選べる仕組みというか、情報が多いので、まだそこまで整備されていないのかなという印象があります。

○北村委員長 それ完璧にできれば、僕らは広告会社の大企業の大富豪になれるかもしれませぬ。

富田委員は、先ほど、情報が編集されていなくて、観光文化情報ステーションで並べられているだけだということでしたが、これはどうしたら動くと思いますか。

○富田委員 全部をいきなりやろうとすると、気が遠くなる話なのですけれども、今、僕が思っているのは、まずポータルというのは、情報と情報をつなげるということだと思うので、それはやれるのではないかと考えています。

しかし、その一つ一つの精度やクオリティーは、おのおの専門的な知識を持った人たちが組み立てるので、そういう人たちを育てると同時に、編集できる人たち、それがコミュニケーターみたいなものかもしれません。難しいのですけれども、国際芸術祭の話をしてしまうと、ボランティアの人たちは、自分たちがかわりたいという人に手を挙げていただいているのです。でも、これはすごいチャンスだと思っていて、芸術祭というアートのまだ見えていないものに対して、何かをしたいというか、何かできるのではないかと人たちが結構多いです。そういう人たちは、潜在的にそういうポテンシャルを持っていると思っています。いろいろな人がいて、例えば、翻訳ができる、英語がある程度できる、絵を描いたりすることができる、文章をちょっと書ける人たちがいるというところに、そういう人たちを活用という言い方は余りよくないですが、そういう仕組みをうまくつくっていくことはすごく大事だと思います。

そういう人たちがいないと、編集もできないし、発信もできないと思うので、大きな流れとして、すごく変なことですけれども、そういうことができなくて初めて、各ジャンルを専門的にやっている人たち以外、そういう人たちの目から横断的に読み解いてもらう

というステップが必要になるのではないかと考えています。

今言いたいことは、文字だけでは伝わらないとおっしゃいましたけれども、伝えなければいけないところも逆にあると思うのです。素人目線という言い方は変ですけども、初めて接する人がどういうふうに感じるができるか、リテラシーがそんなに高くない人たちに向かって、どういう言葉で発したら興味を持ってもらえるのかというレベルで考えられるということですね。中にいるとわからなくなってくるので、外の目があったり、外の人、まれ人といいますか、要するに外から来た目を持って何かを読み解いていくということはすごく必要だし、そういう中にいる人たちと外の人たちとのつながりによって情報が精査されるような気がします。

答えになっているかどうかかわからないですが、以上です。

○北村委員長 どうすればいいのでしょうか。その情報を扱う人が当然必要だと思いますし、情報というのは古くなってしまわないので、常に新しい情報を発信し続けなくてははいけませんし、一度サイトを立ち上げたら日々更新しなければいけないし、大変な仕事だと思います。

それは、札幌市がやっているというふうに見えたほうがいいのか、それとも、先ほどのSAPPURO（サッポロスマイル）ではないのですけれども、行政が主導でやっているというよりも、ただ、行政が主体になるので大変難しいような感じがします。

いかがいたしましょうか。

○富田委員 やはり、参加型という話がいろいろと出ているのは、先ほど言ったSAPPURO（サッポロスマイル）の実験は、シビックプライドの醸成です。つまり、これはある人の言葉ですけども、自分たちごととして文化芸術を考えられるかということが大きいと思うのです。つまり、市民が文化芸術を自分たちで担って自分たちで発信しているという意識をいかに持てるかということなので、それを加茂課長がおっしゃっていたように、一方的に、こういう場を用意してあげるから、この中でやってくださいというふうに見えると、僕は、そこで何か失われるような気がしています。そこで、稚拙かもしれないですけども、情報発信や文化芸術を楽しむ何かを自分たちで見つけたという意識の醸成がキーに、なると思います。それは、すごく手間もかかるし、時間もかかるし、人もかかるかもしれないけれども、そのステップを外して一気に何かをどんとやろうとしても、先ほど育てるという意味で言ったのは、メディアということもそうですけれども、全てに通じてきて、物事を育てるというのは、古い考え方ですが、メディア都市と言い切ってしまうと、物すごいスピードで何かができそうで、そういうダイナミズムという言い方はおかしいですけども、そういうこともできるかもしれませんが、やはり、一つ一つを丁寧にいかないでいくということの集合が、ひいては、そういうものをつくり上げるのではないかと思います。

一気にやろうとすると、どこから手をつけていいかわからないというふうになると思うので、そこら辺をうまくまとめる仕組みづくりですね。自分たちが、はい、どうぞ、この

中でというフレームやシステムをつくるわけではなくて、複雑だったり、乱雑になったりするけれども、市民が自分たちの言葉で語っていることに人は感動するような気がします。

○尾崎委員 今、富田委員がおっしゃったように、誰がどこに向かって語っているのかというところが結構大事だと思っています。やはり、何だかわからないというか、なかなか伝わりづらいのです。文化や芸術は、その場所に行って、そこで体験するのが基本なので、その情報自体も、まず最初は、観光文化情報ステーションなどに情報をとりにいくというところから始まっていいのではないかと僕は思っているのです。

こういう時代ですから、当然、そのウェブ版はあるべきだと思うのですが、そこに行けば必ず何か情報が得られて、その次に、同時作業にはなっていくのでしょうけれども、ウェブ版が編集されていて、そこには、何だかわからないのですけれども、芸術のことにやたら詳しいおじさんがいて、何でも話してくれるみたいな、今回の四季の主演は札幌市出身でとか、あそこの花火大会は何万発の花火を打ち上げられてとか、そういったことにやたら詳しい人から生の情報を聞けるといいますか、なかなか難しいと思うのですが、そういうリアルなものの方が楽しいと思うのです。これは個人的な意見です。

ですから、教育文化会館だったり、観光文化情報ステーションだったり、まず名称が悪いですね。言いづらいです。これから始めなければいけないと思います。僕は、好きなので行くのです。教育文化会館のチラシが並んでいるところも好きなので行くのです。僕は、近い仕事をしているので、どういったことをやっているかということは何となくわかりますけれども、そうではない方もいるので、これは何のチラシなのか、どういうことが行われているのだろう、どういう人たちがやっているのだろうということが本当にそこに集約されているといいなと思います。

○北村委員長 情報の流し方、情報の使い方、例えば美術館だったら、美術館のボランティア組織があって、そこで1年間なりの研修を受けて、毎日、毎日、作品解説をボランティアでやっていらっしゃるんですね。そういう人を育てるということですね。それは、コンシェルジュと呼ばなくても何でもいいですが、そのセンターに行ったら、今、おっしゃっていたように、やたら詳しいおじさんがお話ししてくれる、案内してくれる、導き手になってくれるという人ですね。それは、すぐには育たないかもしれないけれども、人材育成の一つの目標として、情報を専門的に伝えてあげられる人をボランティアでもコンシェルジュでも、時間がかかるかもしれませんが、育てていくということでしょうか。

ほかに何かございませんか。

○清水委員 私は、実際のというものもニーズがあると思うのですが、ネットのほうも、つくりやすいし、参加しやすいと思うので、うまくできたらと思うのですが、例えば、口コミサイトなどをつくって、札幌市の行政のほうは管理人として機能するというのはどうかと思っていました。

成功している情報系サイトというと、お料理だったらクックパッドが有名ですし、コスメでしたらアットコスメというものもあります。とにかく、みんな、どんどん口コミをす

るのです。口コミすることによって、ゲーム性や、ランキング上位を狙えとか、そういう楽しみをうまく生かした情報サイトですね。それをやると、市民参加と情報発信、情報収集、そして情報編集というアクセスもできるので、いろいろな問題点にうまくかかるのではないかと思うのです。

例えば、出会い系の口コミや勧誘文を書いてあるものをどんどん消していくという作業を行政で管理してやって、基本的には、全然役に立たないような大したことない口コミでもどんどん書いてもらって、それを人から「いいね」と言われることによってランキングが上がって、優位な情報はどんどん上に行くし、余り有用性のない情報は下がっていくとか、情報編集が勝手にできる仕組みというのは結構いい例があると思うので、そういうものを運営するのはいかがでしょうか。

○富田委員 もちろんいいですね。食べログアート版みたいな。

○清水委員 そうですね。私は考えたときに、人は報酬がないとだめかと思ひまして、名誉といいますか、みんなが見てくれて私が1位だということも大事だと思います。例えば、5,000いいねをとったら入場券をもらえとか、そういうことも考えたのですけれども、クックパッドと楽天のレシピで、楽天はポイントをつけたせいでうまくいかなかったのです。利益がとれるようにしたら逆にだめになったものもあるので、口コミサイトのノウハウを研究したらいいのではないかと思います。

○南副委員長 そこには一つだけ大きな問題がありまして、一番悪いのは、人気が高いものはアートとしてよくないのかという問題をどうやってクリアするかということです。そこをうまくフォローするアイデアが出れば、すごく使えるのです。

○鈴木委員 ニコニコ動画で、そういうことが結構多いのです。

再生回数が多いものがどんどん上に上がって行って、投稿したばかりの新人の人たちの作品が埋まったりしているときに、運営している人たちがそのランキングのページの下の方に、今週のピックアップみたいな感じで、新しい人、ランキングに上がっていない人たちを取り上げるという対策をしております。ですから、工夫によっては埋もれないようにすることもできると思いますし、何をピックアップするかに関しては、市のほうでやるのではなくて、それこそ、すごく知っている人たちが会議をするのかどうかかわらないですけれども、何かしらできるのではないかと考えています。

団体の口コミサイトや、マイナビの回し者みたいになってちょっと嫌なのですが、いろいろな企業などのページを検索するときに、どういう系統の会社がいいのかと選んで検索すると、その企業のプロフィールなどが載せられているページがあって、そこを見てエントリーするという学生もすごく多いので、そういうことも口コミサイトと併用してつくると、いい感じにまとまるのではないかと思います。

○石川委員 最初の富田委員のボランティアの話ですが、僕は前に、通年でやってくれるようなアートボランティアがいればいいなという提案をさせていただきました。そういった任意で登録してもらった市民ボランティアに、札幌の文化芸術の情報を伝えるようなメ

ディアをつくってもらえたらおもしろいのではないかと思います。

今のいろいろな美術館の情報は、施設単位で広報を頑張っているのではなくて、広報だけを専門にやるボランティアを中心にしたチームみたいなものをつくってウェブサイトなり、何か紙媒体をつくるということですね。今、ウェブの場合の展開の仕方は、清水さんなどからいろいろなお話が出ていまして、鈴木委員からも出ていたのですけれども、副委員長から口コミなどはなかなか難しい部分があるというお話がありました。僕個人では、最終的にはプレーン的な編集者がコントロールしないとダメなのではないかという気がします。

これは僕の意見ですけれども、ニコニコ的な口コミだけでやるのはなかなかきついのではないかと考えています。理想論としては、口コミで盛り上げるというのは、すごいおもしろいと思うし、楽しいと思うのですが、そういうものがある程度軌道に乗るまでは、ボランティアをベースにしつつ、きちんと内容をコントロールして、自由投稿方式ではなくて、やらせではないのですけれども、プレーン的な人がしっかり編集した上で、市民参加のアートの広報を考えていくほうが無難ではないかと考えています。

広報のスタイルとしては、北村委員長の案の中にもあるのですけれども、面白さ第一主義というのはすごくいいと思うのです。これをキャッチフレーズにしてもいいとされていて、アートや芸術を面白さ第一主義という視点で編集して紹介する。どんな展示でも面白さ第一主義という視点でいろいろと紹介するようなメディアがくれたらいいなと思います。ただ情報を羅列するのではなくて、何らかのポリシーで、できれば面白さ第一主義、あとは子どもも楽しめるというような、親子で楽しめるという視点でメディアをつくれたらいいのではないかと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

情報発信の仕方やそれにかかわる人材の育成、市民の参加などが問題になっています。

私の個人的な意見を言わせていただくと、広報普及をアートセンターの業務の一つの大きな柱に入れてみたのですが、そのマネジメントといいますか、ボランティア、市民参加型ももちろんそうですけれども、札幌がアートのまちなのだということの印象づけからここに入っただけでいいなという感じがします。ファイターズやコンサドーレもここにあっていいかと思っているのですが、全部がつながっていけばいいのかなという感じがします。オペラもダンスも演劇もコンサートも美術館もですね。ただ、そういうところのコントロールは、誰かが責任を持ってやらなければいけないかなと思います。そういうコントロールができるような人材も少しずつ育てていくことが大事だと思っています。

○尾崎委員 ちょっと前に、アートセンターのことをお話しさせていただいたときに思ったのは、アートセンター自体が一つの施設に入ってしまうということは、その施設を動かすことがミッションになりかねないという懸念材料として出てくるのではないかと思います。今、こうして話題になるように、情報を統括することだったり、いろいろなイベントを統括していくという頭脳になっていくはずのところ、一つの施設を動かしていくこ

とにとらわれてしまうのはちょっと問題だと思いますし、そういうふうに進んでしまうのは嫌だなと個人的に思っています。

○北村委員長 アートセンターというのは、施設を動かすものではなくて、機能させるものではなくて、もっと多角的な仕事をすることでしょうか。

○尾崎委員 ええ。文化交流複合施設内に入って、当然、どこかに場所は必要なのでしょうけれども、文化交流複合施設とアートセンターがセットになってしまうと、アートセンター自体が違うものになってしまって、それはまずいと思っております。

○北村委員長 アートセンターの役割がどういう形になるのか、なかなか見えてこないというか、私たちもよくわからないのですけれども、第2期円卓会議が理想形みたいなものを出していますので、それがどこまで実現するのか、あるいは、私たち3期目がそこをどういうふうを実現すべきか、提言するのかということだと思います。

○南副委員長 まず、ふと思ったことを言わせていただきたいのですけれども、今回、芸術祭が宣伝されているけれども、なかなか浸透しないという話がありますね。一つは、まだ市民に手ざわりとして実感がないからで、その実感のない、何かよく見えないものに対して、どう反応していいのかわからないというのが現実ではないかと思うのです。

僕は、前にも言ったけれども、お祭りだよという感じは大事だと思っているのです。そして、このお祭りだよということこそ、まさに石川委員がおっしゃった、市役所全体がお祭り気分になられたような状態をつくる。それで、何かいつもと違うぞというようなものが出てくる。あるいは、例えば故宮博物館展が来て、こんな小さい白菜か何かのアートで盛り上がったりするわけではないですか。いろいろあるけれども、それがたくさんあり過ぎて見えないということもあるのではないかと思います。

そして、行政の問題で言うと、非日常的な芸術祭みたいなものとか、短期的、瞬間的なものというのは、ぐっと行政が出てきて、札幌市がやっているのだというのを表面に出したほうがいいたらと思います。しかし、長期的な、年間を通してというものは、やはり市民主体に感じさせるということですね。その辺は、物によって使い分けていくのがいいのかというのが私の感想です。

そして、アートセンターの話で僕が最初に言っていたのは、結局、国際的なレベルとかトップレベルというのは、結局、アートセンターあるいは複合施設にしても貸し館事業ですから、全部、東京のものを持ってきて見せる、海外のものを持ってきて見せるだけであって、札幌がアートセンターとか創造都市と言っても、世界的なものを持っていない状態でそう言うのは何だなというのが正直なところです。まず、札幌がそういうものを持っている、あるいは、そういうアーティストたちが完全にそこで食える状態をつくっている、そして、札幌にはそういうものがあるのだということです。

これは、ファイターズがまさにそうですね。コンサドーレもです。要するに、市の野球場に巨人軍や中日が来ましたとか、ほかにフランチャイズを持っているところに来るだけより、ここに俺たちの球団があるのだというものがあって初めて育つのです。アートもそ

うであって、これが創造都市、アートのまち札幌だというのは、ここにこれがあるからこそアートなのだと、まずはソフトからなのではないかと強く思っております。

以上です。

○北村委員長 人材育成という場合に、一つは、富田委員や石川委員が言ったように、市民参加型のボランティアなりを育成する、あるいはマネジメントをできる人を育成するというところと、今、南副委員長がおっしゃったように、アーティストも育てていくということですね。それが1億円で足りるのか。ちょっと足りないような気がしますけれども、そういうアーティストが生活できるまち札幌であることがわかれば、学生さんも北海道に残ってくれるかもしれないということですね。あるいは、映像作家を育てるみたいなことも、札幌に行ったら映像の仕事がいっぱいあるということがわかれば、それは一つのいい循環になると思いますが、それがどこまでできるかですね。

ですから、人材育成といった場合には、富田委員がおっしゃる子どもの将来への投資もあるだろうし、ボランティアスタッフの育成などもあるでしょうし、最終的にはアーティストがここで生活できるということまで含まれてくるのでしょうか。

○富田委員 僕は、育てる、育てると言っているのですが、育てるというところの大きいところは、大学だったり、教育機関があるわけです。ただ、教育機関が担っていることと市民参加というのは、それも多様なのだと思うのですけれども、民間、企業ですね。民間と企業はイコールになるのでしょうかけれども、そういう教育機関は、どうしても行政的な形で受け取られがちですし、産学官などというお話をよく聞くのですけれども、こういうふうなボリュームが三つかかわってこういうというのだと、やはり、おのおのが開いていないとおもしろいことができないような気がしていて、その一つが、先ほどおっしゃったように、市役所がお祭り騒ぎになるといいますか、ある種、こういうことをやるために、化けるといいますか、演じるということではなくて、仕組み自体も一緒に変えていくような、実験になるかもしれないですけれども、教育機関もある種の実験を外に出てする、実践的な学びをする。逆に、学校は、閉じられたものではなくて、外からどんどんアプローチをしていって、民間と何かしてみるみたいなことが促進されていくということが、いろいろな新しいモデルをつくっていくのではないかと思います。

ですから、アートというものと、今まで余り思っていなかった分野、例えば、本当にがちの化学の研究とか、なかなか出づらいのですけれども、えいっとやったら何か化学反応が起きるのではないかと場所も必要なのではないかと思います。

僕は、クロストークとここに書いていますけれども、必ず何かを得られるわけではないのですけれども、そういう実験的な、ラボ的な試みがなされる場所がないと、新しい発見的な、北村委員長が書いていますが、おもしろくかつ発見的というのは、そういう偶然から生まれるというのも大きいし、それは人と人との交わりもそうなのですけれども、出会いで生まれたりするということがあるのではないかと思います。

○北村委員長 例えば、化学者とアーティストがどういうところでコラボレーションの場

をつくれればいいと思いますか。

○富田委員 漠然としていますけれども、やはり、アートと言われているものは、アートの文脈での価値づけがあるのです。僕は、南副委員長のお話がすごくおもしろくて、ごみ収集車を誰もアートのキャンバスとして考えなかったということがみそだったと思うのです。アートだったら、まずは、そういう場所が準備されるとか、例えば美術館であるとか、場所を変えてみるとか、アートがアートだと思われているものの視点を変えて、いろいろなところからいじってみるということですね。

○北村委員長 触媒をどうしましょうかという話です。ですから、アートと化学があったとしたら、誰かが触媒にならないと結びつかないですね。

○富田委員 それで、ファシリテーションであるとか、これとこれは合わさるとおもしろいのではないかというディレクションの目であったり、企画の面白さ、それも結局は人に戻ってしまうのですけれども、そういうところではないかと思います。これは種としておもしろいのではないかと常に目を張っている人が必要ではないかということです。

○北村委員長 そうですね。

○鈴木委員 富田委員が化学反応とかクロストークとおっしゃっていたのですけれども、私は、2年前に、クロスホテル札幌とサッポロ・シティ・ジャズと私の研究室のアートマネージメント音楽研究室で産学官の連携プロジェクトでクロスラボというイベントを企画したのです。それをやらせていただいて、北村委員長が面白さ第一主義と書いてあるように、本当におもしろかったのです。自分ができないことを、企業がサポートしてくれる形になったのですけれども、そういう機会があればあるほど、コアなファンといいますか、本当にやりたい人、札幌市の芸術文化に本当に携わりたいという人のふるいがかけられる機会になるのではないかと思います。こういう機会を誰が動かすかということとはわかりませんが、必要かと思いました。

また、創造都市とおっしゃっているのですが、イメージがなかなか湧かないのです。今のままだと色で言うとグレーといいますか、ちょっと重たいと思っています。広報を頑張っても、一生懸命なのはわかるのですけれども、頑張っているねみたいな他人行儀の感じになってしまうのではないかと思います。

私は、こういうふうに明るいものになってほしいなという例えで言うと、兵庫県立文化センターを皆さんはご存じでしょうか。佐渡裕さんという、今年PMFで指揮者として出られる予定だった方が出られなくなったときに、代わりに出ていただくことになった指揮者の方です。その人が兵庫県立文化センターの芸術監督になったときに、開館と同時に、その市の広報宣伝のやり方がすごく特殊で、「第九」をばんと広告に出して、クラシックの概念を変えさせるような明るいことをやったというのはすごくおもしろいと思っています。そういう雰囲気市民に伝わっていけばいいなと思いました。

○北村委員長 いろいろな意見があって、まとめるのがなかなか難しいのですが、どうしましょうか。

最初に、情報公開のあり方、あるいは、それにかかわる人材の問題、人材とは一体何なのか、そこでどういうふうに広報するのかということまでできました。

○南副委員長 一つの言葉としてあったのは、コンシェルジュですね。アーティストをどうというふうを集めて、どうというふうにつくるかという問題です。もう一つは、北村委員長の面白さが第一主義という言葉キーワードにした展開ですね。最終的には、この2点でいくのかなと思います。コンシェルジュ云々も、最初のころに富田委員がコミュニケーターとおっしゃっていたのですが、最終的にはコンシェルジュのところにおいてしまうと思います。ですから、この部分を詰めていくのがまず最初なのかと思います。

○北村委員長 今のご提案は、面白さ第一主義がいいのかどうかわかりませんが、札幌でどういうことが行われているのかということを知ってもらうための手だてをどうするかということと、必要な人に必要なことをどのように伝えるのかという手だてを考えるということでしょうか。

何かご意見はありますか。

○石川委員 僕は、今、南副委員長がおっしゃった中で、面白さ第一主義でいいと思うのです。

広告やデザインも好きですけども、すごく認知されている広告やスタイリッシュな広告などは、必ずユーモアがあるわけです。ですから、面白さ第一主義をどう解釈するかというレンジは広いと思うのですけれども、僕は、すごくアーティストックでスタイリッシュな中にユーモアも入れることはできると思いますし、そういう映像作品やCMも見たことがあるので、例えば、今度、芸術祭のポスターを見たときに、人をすごく笑わせるというものではないのですが、スタイリッシュだけれども、ユーモアがあるような、ちょっと目を引くようなポスターをつくればいいのではないかと思います。

僕は、面白さ第一主義と、コンシェルジュ的な人材育成ということには賛成です。

○北村委員長 ほかにいかがですか。

あと2回か3回ぐらいの会議で私たちのミッションを固めていかななくてはいけないのですが、そういう観点から見たときに、面白さ第一主義のことを言われて困ったなと思っていますけれども、札幌におけるアートがどういうものなのかということを知ってほしいということ。そこを大勢の人に共感してもらいたいということです。

もう一つは、コンシェルジュの養成ですが、要するに、アーティストと市民との間をつなぐ人ということですか。触媒になれる人ということですか。どこへ行ったらその触媒に会えるのですか。

例えば、北大でも、民間からの問い合わせが来て、こういう特許を取りたいのだけれども、どういう先生に相談すればいいのですかという話 came たり、こういうイベントや講演会をやりたいのだけれども、どうしたらいいのですかという話 comes ののですが、そのときに、とりあえずここに相談してくださいという窓口があるのです。自然科学でも芸術でも何でもです。それをポータルサイトと呼んでいますけれども、例えば、今度、フランスか

らこういうアーティストが来るのですけれども、北大で後援しませんかという、例えば僕のところに来て、それではお金をどうしますかという相談が始まったりするのです。ですから、結果はどうなるかわかりませんが、とりあえずここに相談すればというサイトが北大にはあります。

ですから、僕が考えたポータルサイトというのはそのようなイメージですけれども、アートのことであれば、とりあえずここに聞けば、企業でも、民間の方でも、個人でも、アーティストでも、きょうは伊委員はいらっしゃらないけれども、アマチュアの人がバレエの発表会をやりたいのですけれども、会場はどこにしたらいいのでしょうかと聞いたら、いろいろと手配してくれるとか、練習会場はどこがいいのでしょうかと言ったら、あそこを貸してくれますよとか、そういうことをやってくれるということでしょうか。

○富田委員 それは場所ですけれども、ある意味、よろず相談室みたいなところですね。問い合わせ窓口、入り口になるというのは、ただ受けるだけではなくて、こちらで何かを発想したときに、1人ではできないといいますか、それを形にするには1人の力では足りないけれども、すぐに何かの答えが返ってくるという存在はすごく重要な気がします。

そうではないと、先ほど言いましたメディア都市みたいな、グレーとおっしゃいまして、グレーなのか重いのかわかりませんが、やはり腰が重くなってしまおうような気がします。思いついたことをおもしろいねと言ってくれるような窓口は、観光文化情報ステーションのようなところにある気がするのです。あそこで相談できたらいいと思っています。そういう意味で、コンシェルジュがそこにいいなと思います。

○北村委員長 それは、尾崎委員がおっしゃっていたように、観光文化情報ステーションを、あそこにああいうものが、チラシの置き場所があっても構わないと思うのですけれども、それとは別に、よろず相談所的な、あるいは、先ほどあった札幌のアートのことを知っている人が常駐しているようなインフォメーション機能ですね。

○富田委員 そのインフォメーションも、ただそこにある情報をくれるだけではなくて、何らかの……

○北村委員長 富田委員の話では、編集してちゃんと伝えられる人ですね。

○富田委員 それは、市民記者だったり、市民コンシェルジュと言っているのでしょうか、コミュニケーターと言うのでしょうか、そういうところから、自分の言葉で語るというのは、そのクオリティーはなかなかそろわないと思うのですが、そういうところを用意してあげるというのは、自分たちで楽しめるということで、その情報の確かさではなくて、それを楽しんでやっていること自体に価値が生まれるのではないかと思います。

○北村委員長 理想的には、190万人がみんなボランティアになればいいですね。

○富田委員 そうですね。

○北村委員長 190万人の方々が365日ボランティアをやっていれば、もちろん市役所も含めてね。

○富田委員 ちょっとでもいいと思うのです。一日一善ではないですけれども、この日は

文化を考えていく日というか、アートを考えていく日というか。

○北村委員長 難しいですね。

○山田委員 今回のコンシェルジュのお話ですが、この間、シアターキノで「グランド・ブタペスト・ホテル」という映画を見たら、まさにホテルのコンシェルジュの話がありました。主人公のコンシェルジュが、あることで追われて、それを助けるのが、特に名前は無いのですが、コンシェルジュネットワークです。それは、ブタペストとかヨーロッパにたくさんいるのですけれども、その人たちから次の逃げ道はこうだというふうに電話一本で伝わって行って、何とか逃げられたという話なのです。

それから考えると、先ほどお話があった観光文化情報ステーションにコンシェルジュをどんと置くというのもありだと思えるのですけれども、ネットワークをつくるという方がしやすいと感じたのです。というのは、先ほどのお話のように、何のことに詳しい、この方に聞けば何でもわかってしまうというおじさまがたくさんいると思うのです。

ある方は、日ごろの公務が終わって、日曜日にボランティア活動をなさっているのです。例えば、札幌市資料館とか開拓の村などで活動して、観光客などの質問に答えたり、案内したりということをやっているのです。1個にまとめるのはなかなか難しいけれども、そういうコンシェルジュ的な方々はいっぱいいるので、そういう人たちのネットワークをつくるということですね。誰がつくるかが問題ですけれども、例えば札幌市でまとめるというか、そういう仕組みづくりをするということがあれば、それこそ、今の皆さんの持っているいろいろな方をつなげて、この問題はA施設の方に、この問題はB施設の方、あるいはC団体の方などという方法だと実現しやすいと感じました。

○北村委員長 僕も、30年ぐらい前にフランスへ行って、コンシェルジュという言葉を知らないままに、下宿屋の地下にコンシェルジュがいて、執事などという立派な人ではなく、水道管が破れたといったら直してくれるような人ですけれども、そういう人たちのネットワークをつくるということですね。コンシェルジュであれ、媒介者であれ、触媒者であれ、そういうネットワークをつくるということを一つの提言として出すことはできると思います。面白さ第一主義がいいかどうか分かりませんが、札幌アートのイメージをつくるという提言を出すことはできると思います。ちょっと小さいような気がするのですけれどもね。

○南副委員長 もう一つ、コンシェルジュの役割として大事なことがあります。例えば、こういう企画でこういうことをやりたい、お金が足りない、もう少し企業を絡めてくれないかと。企業からすると、そのお金を出すのに一体何のメリットがあるのかということなんです。ここをどうやって説得するかです。これができることが大事ですね。その意味合いというか、これだけのことをやるネットワークに企業が参加する意義です。あるいは、文化とは関係ないセクションですね。先ほど、ごみ収集車と言われましたけれども、ごみ収集車にとってはうれしくも何ともないわけです。そういったところを参加させるための仕組みをどうするかです。ここが、これから考えてなくてはならない大きなポイントかと思っ

ています。

○北村委員長 富田委員の言われた産学官とか、鈴木委員もご自分のご経験でのコラボレーションのことをおっしゃっていましたが、財政的な面も含めてマネジメントしてくれるような人がどこにいるかという、やはりアートセンターにいるのかなと思うのです。その辺はいかがですか。

○清水委員 人がどこにいるかという、人材育成という単語にまとめると、3カ月の研修を受けてその人がコンシェルジュになれるかという、絶対になれなくて、好事家をどこから探してきて、コンシェルジュで食える仕組みをつくるといいますか、アーティストが食えるまちではなくて、コンシェルジュが食えるまちということになると思うのです。

でも、今聞いていて、仕事の内容は産学官でいうと、官に近いところが多いという気がするのです。お金を引っ張ってくるとかですね。コンシェルジュを育成するというのは、ゼロからは難しく、どこから発掘してきて、それだけで食えるぐらい、特権市民ぐらいの感じですね。それこそ、コンシェルジュは、札幌市役所の市の職員の特別枠ということで、ずっと入ってから何十年間そこにいて、全部やってくれるぐらいにしないと……。

○北村委員長 それは、美術館ではキュレーターがそういう仕事をやっていたのですけれども、美術館の中に入ってしまうと、外にはなかなか出られないので、自分の業務でいっぱいいっぱいということなのでしょうね。キュレーションも大事ですし、マネジメントも大事ですし、エデュケートも大事なのだらうと思いますけれども、それはどういう仕組みで誰が担えばいいのでしょうか。

○石川委員 コンシェルジュというのは、実は小さいようで大きいことだと思っていて、個人というよりもグループになると思うのです。札幌コンシェルジュみたいな一つのブランドといいますか、一つのプロジェクトの中で、それぞれ得意分野を持っていて、質問の窓口は一つだけれども、答える人はいろいろな人がいるという仕組みです。それは、アートセンターの役割の一つになり、アートセンターの職員ということにもなると思います。それプラス、アートセンターの職員だけではだめなのではないかと思うのです。

やはり、それプラス、在野といいますか、札幌のいろいろなところにキーマンと言われる人がいますから、そういった人たちに回答者をやってもらうということです。また、コンシェルジュというのは、すごく可能性があって、結局、コンシェルジュがうまく働くと、いろいろなアートの需要や供給の情報がコンシェルジュに入ってくるようになります。

例えば、ある民間会社が会社のイベントをやるのだけれども、こういうことをやってくれる人はいないかとか、こういう音楽をやってくれる人はいないかとか、いろいろやりたい人、やってほしい人みたいな情報がコンシェルジュのほうにどんどん集まってくると、コンシェルジュ自体がイベントやアートプログラムをプロデュースできていく可能性はすごくあるのです。

ですから、アートコンシェルジュというのは、グループとして存在すればいいのではないかと思います。そこでは、市の人がいなくてもいいし、委託を受けた民間の人ですね。また、

ボランティアです。芸術アート好きのボランティアの人は札幌に相当いると思っているので、本当に下手なプロよりもずっとあらゆる美術館めぐりをしている人がいて、実は、そういう人のほうがアート情報を持っていたりするのです。

○南副委員長 僕は、コンシェルジュとアートディレクター、ボランティア、マネジメントなどを別にしたほうがいいと思っているのです。

イメージ的なものを書かせていただきます。

例えば、市民、企業、アートディレクター、マネジメント、ボランティアです。このボランティアと一般市民を分けたのは、企業というのはお金を含めて、ボランティアはよく知っている方々ですね。それから、アートディレクターは、アートセンターの職員だったりするわけです。それから、マネジャー、マネジメント、あるいはコーディネーターです。そういったアートコーディネーターみたいな人たちです。それから、実際にいるアーティストです。

こういう人たちの枠の中に、中央点にアートコンシェルジュというのがいるのです。これはこれで独立したもので、これらをネットワーク的に組み立てていくという役割のイメージを持っていたのです。

ですから、ボランティア、アーティストなど全部が入ってきてしまうと、ここがパンクしてしまいます。例えば、アートディレクターだったら、この部署の専門のアートディレクターが手いっぱいの仕事をやっていると思うのです。

ですから、ボランティアも、いろいろな種類の人たちがいるから、これだけ入ってしまうと、このグループが巨大化してしまうわけです。ですから、アートコンシェルジュグループというのは、これらをうまく回すための車輪なのだというイメージを持っていたのですけれども、それではだめですか。

○石川委員 それでいいと思います。

僕もそう思ったので、アートコンシェルジュの役割としては、今、南副委員長がおっしゃったように、アートディレクターとかそういうところに密接なリンクを持っているということです。リンクを持っていて、もし必要があれば、そういったところとつなげたりする機能があるということでもいいと思います。

もう一つだけ言いたいことがあったのですが、先ほど富田委員や尾崎委員がおっしゃったように、アートセンターをつくと、アートセンターはアートセンターのことばかりやるのではないかということで、それに補足したいのは、アートセンターをつくと、アートのことは全部アートセンターがやればいいのかという話になってしまうのは嫌なのです。今、副委員長が言うように、札幌市職員全体がアートのお祭り気分というのはすごく重要で、アートセンターができると、逆に、アートのことは全部アートセンターがやれよ、ほかの部署は知らないよということになってしまうのは、個人的にとっても危機感があります。

○北村委員長 ありがとうございます。

もう大分時間がたっていますが、南副委員長が示された図式によってすごく明確になってきたという感じがしますが、皆さん、何かご意見はありますか。

僕は、アートコンシェルジュのイメージというか概念を皆さんと十分共有できているかどうか不安なところがありますし、アートセンターなどとうかがわっていくのか、組織とうかがわっていくのか、清水委員が言われるように、アートコンシェルジュが一つの職能として成り立つかどうかですね。それから、産学官との関係をどうするかということもあります。まだいろいろな問題があるかと思いますが、皆様の中で、アートコンシェルジュというものが一つのキーワードになるということはいいいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○北村委員長 面白さ第一主義がいいのかどうかわかりませんがね。

○石川委員 英語のファン・ファーストでいいのではないですか。

○北村委員長 僕は、横文字を余り使いたくないのです。

僕は、30年前までフランスにいてもコンシェルジュとは何かと言っていましたし、今でもコンシェルジュとは何かという人のほうが圧倒的に多いと思うのです。

それでは、ディレクター、ボランティア、アーティスト、マネジメントとどういう分業なのか、あるいは協働ができるのかということはもう少し考えなくてはいけないと思います。

○南副委員長 具体的に、これでいいのであれば、まさにおっしゃったように、これはどういう機能を持って、具体的に、こういうときはこうなのか、こういうときはこうなのかというのをイメージしてもらって、これはちょっとまずいのではないですかというものが出来ていいわけです。今、適当に図で示して話をしただけなので、果たしてこれが本当なのかというのは、少なくとも考え直さなくてはならないものが多々あると思います。

○北村委員長 それでは、アートコンシェルジュという南副委員長がお描きいただいたことを頭に思い浮かべながら、具体的にどんな問題の発展形があり得るかどうか。

○南副委員長 あるいは、今まで、皆さんに細かく具体例を出していただいたものがこれに対応するのかどうかをもう一度チェックしていただくということです。

○北村委員長 今日の大きなテーマの一つは、情報の共有の問題といいますか、情報を伝えるということですね。アートコーディネーターが伝える役目を担うのかもしれませんが、そういう観点も含めて、この先、アートコンシェルジュ的なものが札幌のアートを動かす車輪であるとして、どんな問題点なり、どんな可能性なり、克服すべき課題なりがあるかということのを改めて考えてもらわなければいけないと思います。

ただ、なかなか難しいですね。今日お話しいただいた、情報の問題、人材育成の問題、市民参加の問題などと、人材の育成もその子どもからアーティストまでいろいろな人材を育成しなければいけないということもありますけれども、こういう事柄とアートコンシェルジュの役割とはどういうものなのかということをおみんなで考えたいと思います。残念ながら、僕はまだ十分共有できていません。

○南副委員長 僕は、これはここの部分の話だと思っていたのです。こちらについては、まだ十分に話し合えていなかったと思っています。

○北村委員長 そういう理解ですね。

人材育成、市民参加というキーワードは、アートコンシェルジュの問題の中にはまだ含まれてきていないということでしょうか。

もう一つは、では、アートセンターとアートコンシェルジュの関係はどのようなかということですね。

○南副委員長 モデルのイメージは宿題ですかね。

○北村委員長 そうですね。

皆さん自身が課題として出されたさまざまな問題点を考える上で、一つの核になるのがアートコンシェルジュだということまでは、今日、皆さんと共有できたと思うのですが、それが具体的にどういう形で具体化されるのかということをお考えいただけますか。こういう宿題は難しいですね。

○清水委員 私は、アートコンシェルジュ、そんな人がいるのかという実現可能性みたいなところにこだわっていたので、そこを一旦置いておいて、札幌が創造都市としてうまく飛躍するための仕組みとして、こういったモデルがあるのではないかというモデルを構築するために、そこをもっともっといいようにということで、各パーツの実現性というより、こうしたモデルによって創造都市さっぽろのさまざまな問題点をどう解決するかという感じで持っていけばいいということですね。

○南副委員長 もちろん、僕はそう思っています。

○清水委員 わかりました。

○北村委員長 鈴木委員がグレーだと言われた創造都市さっぽろをもう少し明るい色彩に見えるような形にして、一つのモデルケースを考えてみるということでしょうか。

私は、創造都市さっぽろの実質化という言葉を使わせていただきましたけれども、実質化を担う者として、アートコンシェルジュが核になり得るのかということも考えていただくということです。いろいろなことを考えなくてはいけないのですけれども、一つは、今日お話しいただいた情報の問題、情報伝達の問題など、僕は人材育成もかわるかと思いましたが、情報公開の問題などで、アートコンシェルジュ的なものがどう働くのか、どういう職能として、アートセンター、あるいは観光情報ステーションとの関係でどうなるのか。それから、創造都市さっぽろとの関係でアートコンシェルジュがどういう担い手になり得るのか、そのモデル的なものを考えてみるということですね。

では、面白さ第一主義とアートコンシェルジュはどう関係するのですか。

どういうふうに皆さんに宿題をお出ししたらよいでしょうか。

○南副委員長 多様なものを次までに考えてくるのは難しいと思うのです。ここの部分については、こうなのではないかというものを掘り下げて、それぞれ一つでもいいから考えてくるぐらいの方がいいと思います。もちろん、人によっては、そのために複数のことを

考えなければならないと思うのですが、その方がやりやすいと思います。どうでしょうか。
○北村委員長 アートコンシェルジュをキーワードにして、今日皆さんにお出しただいたようなさまざまな問題のどこを掘っていけるかということを考えるということによろしいですね。それぞれ皆様がどこの部分を突き詰めて考えていけるか、全部を考えるのはなかなか難しいので、それぞれのお立場で、アートコンシェルジュをキーワードにして、将来の札幌のアートシーンに何か明るい未来図を描けるようなことがあるかどうかをお考えいただくということでしょうか。ご理解いただけますか。清水委員は、どうですか。

○清水委員 今思ったのは、例えば、今うまくいっていないから、アートコンシェルジュがうまく機能したらうまくいくのかということを考えよう、では、国際芸術祭の広報がうまくいっていないので、ここに当てはめてみようと思ったのです。でも、私は、どうしてゲスト・ディレクターが坂本龍一になって、誰がそれをやっているのかわからないので、どのように考えたらいいのか、専門知識がなさ過ぎて、具体例となると私の立場ではちょっと難しいです。

○南副委員長 逆に、勝手に妄想してもいいのではないかと思います。ゲスト・ディレクターとして坂本龍一が出てきたけれども、坂本龍一が何をしたか、こうしたかということでは、何が行われるのかさっぱりわからないわけです。

今回、一般の市民たちから言うと、坂本龍一は、NHKのテレビに出ている人だ、アーティストだ、音楽をやっている人だというイメージを持っていると思うのですけれども、それがこの芸術祭にどのようにかかわって、どのようになっているかということが一目でぱっと頭の中でイメージができないところに、これは何なのだろうというふうに、ふたをあけてみて、おもしろいとか、初めて反応が出てくると思うのです。もしおもしろければ上がっていきますし、つまらなかつたらへこむと思うのです。今、そういう状態ではないかと思うのです。

もし芸術祭の企画戦略というのであれば、人の顔は見えなくても、中身のアートの顔がちょっと見えづらいというのに問題点があるのではないかと思います。これは、僕も妄想として思っているのです。

○清水委員 妄想の範囲でも、そこから問題点が見えてしまうわけですね。

○南副委員長 そうです。

○清水委員 では、次回まで何個か考えて……。

○北村委員長 昨日、坂本龍一がオーケストラを振っているのを見て、ようやく札幌芸術祭のコマーシャルがテレビに流れたかと思ったら、洋服屋さんのもので、がくっときました。

それでは、妄想であれ、具体的な問題点であれ、掘り下げることであれ、私たちのキーワードとして、アートコンシェルジュ、この名前自体も考えていただければと思いますが、アートコンシェルジュ的なものが札幌のアートを動かす車輪になるとして、どういう仕事ができるか、どういう問題点があるのか、今、私たちが認識している課題とどう

いう連関があるのかということ、網羅的ではなくて、それぞれの立場でお考えいただくということにしたいと思います。

では、そういう宿題が出ました。この先、2回、3回、アートコンシェルジュ的なことを中心に置いて、いろいろなところとの連関性を考えていくということになると思います。

○南副委員長 そうですね。アートセンターと一体どうかかわってくるものか、おもしろ第一主義とどうかかわってくるか、そういったものを構築していくことになると思います。

○北村委員長 ということろまで、今日の私たちの共通の認識ができたということろでよろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○北村委員長 それでは、事務局にお戻ししますので、お願いします。

3. その他

○事務局（高橋調整担当係長） 今日もうかがうございました。

それでは、次回の会議ですけれども、8月下旬から9月上旬までの間で開催したいと考えております。

本日提出いただきました日程調整表をまだ提出されていない方は、後ほど、私にいただきたいと思っております。そちらをもとに、また日程調整をさせていただいて、確定次第ご連絡させていただきます。

また、今回、アートコンシェルジュをどう課題解決に使っていくかというような様式もちょっと考えてみたいと思っております。うまい様式をつくれるかどうか自信はあまりないですが、また皆様に送付させていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○事務局（加茂市民文化課長） 本日も、長時間、ありがとうございました。

たくさんのお話が出ました。常日ごろ思っている課題をかなり聞かせていただきまして、私も感じていることは、アートとそれ以外のあらゆる分野をどうつないでいくのか、これは次の世代の文化芸術を考えていく部分だろうというのは我々も認識してはいて、それをアートセンターなりいろいろな形でどう具現化していこうかというのは、今、壁にぶち当たっているところです。

やはり、ポイントとなるのは、先ほど南副委員長が描かれたように、あそこに人がはまっていくのです。どういう人が担うのか、その中で行政はどこになるのかということです。先ほど、アートコンシェルジュを市の職員にすればいいのではないかという意見もありました。我々も、あそこにどういう人を持ってきてうまく組み立てていくのか、実は、これはアートセンターをつくる上で非常に重たい課題であり、まさに悩みどころであります。

行政職員は、石川委員のように、もっときちんと全庁を挙げてアートをやる、そうありたいと思っております。ただ、市職員は全員が福祉マンであれ、全員がアートマンであれ、全員が環境マンであれと、我々もなかなか背負っているものが多くて、その辺をどうクリアしていこうかなと思っております。

4. 閉 会

○事務局（加茂市民文化課長） それでは、これもちまして、円卓会議の第4回目を終了いたします。

どうもありがとうございました。

以 上